

◇十月三十日は書道芸術院単位認定講習会の下見で、担当の滝春芳・白石和楓・千葉蒼玄先生とともに熱海の温泉旅館「金城館」に伺った。ここは日本詩文書協会や全日本書道連盟が講習会で利用しているとのこと。書道の講習会は慣れており、打ち合わせもスムーズに行われた。

新幹線で東京から一時間、新大阪から二時間ほどの好立地。食堂からは海が一望。この日は入れなかったが温泉も広い。気分爽快で講習会に臨んでいた。来年は平成二十五年八月十七・十八日に開催される。



眺望よく広々した食堂

◇十一月上旬は創玄展・奎星会展・書燈社展・大楽華雪展など、展覧会が目白押し。時間がいくらあっても足りない。



奎星会展にて  
丸尾謙史・千葉先生と

◇十一月は第六十四回全国学生書道展関連の仕事があった。今回より書道芸術院展と併催、主催団体も財団法人書道芸術院に改め最初の全国学生書道展となった。一日に縮切、後三日まで作品整理である。昨今の生徒減で出品数減が危惧されたが、今回から書初め展が合併され半切二分の一部門が新設となったことにより、なんとか食い止められた。

八日から十一日まで特別賞審査準備・特別賞審査が行われ、審査の結果各賞が決定した。



特別賞審査の様子

◇十一月中に第六十四回全国学生書道展審査後の作品整理などが行われ、陳列作品の組み上げ、陳列外作品の返送作業があった。今回より半切二分の一部門が新設となったことにより、陳列形態が変わり作業自体が増えた。

初めてのことがたくさんあり、総務の先生方・事務局はてんやわんやであった。新しいことをはじめようとすると何かと障害がある。出品者の皆様にもご迷惑をかけたかもしれない。しばらくこの体制が続くであろう。徐々に改善したいと思う。

◇十二月十一～十六日まで、池袋の東京芸術劇場で第三回墨輪展が開催された。この展覧会は毎日書道展関係で関東在住の若手作家たちが集って運営している。壘土舎に触発されて結成した



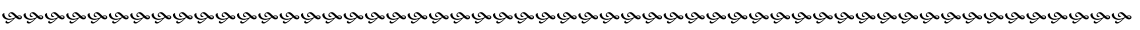
墨輪展の会場風景

と聞く。お互い切磋琢磨して伸びていきたいものである。会場が広く作品が大きいこともあり、力漲るものが多かった。

◇十二月十一～十六日まで、書道芸術院九州支局長の牧泰濤先生が、地元大分の大分県立芸術会館で大個展を開催され、十五日に帰った。東京から大分まで新大阪を通り過ぎての列車の長旅であり、妙な気持ちで移動した。今回で十回を迎えられ、これまでにお世話になった方たちに対する「感謝の念」と銘打たれた。地元で教職に就かれ、退職後、院に復帰されて活躍されている人格者である。綿密な計画とさまざまな企画によって広い会場を作品で埋められ庄巻であった。



牧泰濤個展「感謝の念」



◇本年も新春の銀座は書展の花盛りであった。毎日新春展（和光ホール・セントラル）、竹扇会展、書燈社展、石飛博光展など枚挙にいとまがない。まずは和光ホールで行われた毎日新春展であるが、我らが会長巳年（何度目かはご想像にお任せするが）の恩地先生の作品「巳」で迎えられた。年々出品数が増加しているせい、会場が狭く感じられるようになってきたような気がする。作家の作品のせいであろうかはたまた鑑賞者の数が増加しているからか。いずれにせよ熱気あふれる会場である。セントラル会場も書道芸術院の先生方が数人出品。小生も加えていただき学書の機会をいただいた。竹扇会は作品の間隔を広くとり、すつきりと陳列され作品がより輝いて見えた。

◇昨年大改装を終えた東京都美術館ではジャンルごとに公募団体より推薦された作家を招待し、大規模な企画展が開催された。既に洋画、工芸、彫刻、日本画は昨年四月より順次開催。本年一月四日より十六日まで書道部門が開催された。「TOKYO書2013 公募団体の今」と題して、会派問わず十八団



「TOKYO書2013」

体。各会派数名推薦。書道芸術院からは小竹石雲・下谷洋子・千葉蒼玄先生が参加された。一人幅十メートル、高さ四メートルの壁面割当て大迫力！圧巻の展覧会であった。

◇一月九日から二十一日まで国立新美術館で第六十一回独立書展が開催された。独立書人団は毎日書道展で交流のある団体で、手島右卿先生を祖と崇め、大字書の一つのスタイルを築き上げた。一月十四日、稀にみる関東の大雪の時に伺い欲待された。最近はたくさんの団体が大作を発表するようになったが、まさしく「大作・大字」の伝統団体で圧倒される作品が多く、感銘を受けた。



独立書展

◇2月に入り、第66回書道芸術院展関連の仕事に事務局は追われた。

まず役員（審査会員・審査会員候補）の書類搬入が行われた。大幅な出品数の減少はみられなかったが、無鑑査や一般公募の出品数減少を考えると先行き不安である。伝統を守りながら何か新しい企画などをして出品数増加が図れないか思案中。いろいろなご意見をお寄せいただきたい。

8日、役員作品が東京都美術館に搬入された。久しぶりの場所で皆さんの感覚がすぐに戻らなかつたようである。細かなことでは、審査室に行く経路が変わって迷ったり、館内レストランが変わり昼食がお弁当になったりと、今まで通りにいかないことが多い。

翌9日は朝から大賞選考であった。759点の力作が揃い、厳正な審査で各賞が決まっていく。大賞には現代詩文書部・岡山県の千田春月さんが輝いた。準大賞は5人、白雪紅梅賞は10人。玄遠社関係では漢字部・大阪府の田口鈴木さんが射止めた。恩地春洋先生ほか14名が選考委員。

9日には峰雲賞選考が行われた。恩地春洋・小伏竹村の両先生が玄遠社関係の選考委員（総勢8名）。495点の中から1

点しか選ばれない。本年は前衛書部・青森県の工藤永翠先生が受賞の榮譽に浴された。

15日は陳列作業。陳列会場も改装を終え、今までと勝手が違いバタバタしたが、何とか時間内にすべての作品が大会場に納まった。本年から大作が増え見応え十分。学生展も併催され、変化に富んだ内容であった。

16日は書道芸術院展の作品研究会・表彰式・祝賀会と目白押し。祝賀会は昨年より100人も出席者が多く、会場の帝国ホテルは大賑わいであった。

翌17日は朝から第64回全国学生書道展表彰式が東京国立博物館平成館大ホールで行われた。開式前に鳥谷弘幸副館長の「博物館ってどんなところ？」と題してお話をいただき出席者は熱心に聞き入っておられた。

しかし久しぶりの東京都美術館での展覧会で、反省点が多々。来年に備えて熟慮しなければならぬ。



大勢の表彰式出席者（帝国ホテル）

東京に来て1年になるが、改めて思うのは、なんと展覧会（書展）の多いこと。小さなギャラリーから公立の美術館まで合わせたらくつ拝見したので出向きたいのだが優先順位を考えるとどうしても偏ってしまう。バランスを考えながら行動しなければ視野が狭くなりそうだ。

作品制作場所の確保は東京ではなかなかできないので、こちらに居る時はとにかく作品鑑賞に時間を当てている。とは言っても基本的に17時まで事務所に居るわけだから大してあちこち伺えないが。というわけで今月も展覧会報告をいくつかいたします。

たまたま3月16日は事務所が休みで、千葉蒼玄先生と2人（今や書道芸術院の迷コンビである）で、国立新美術館で行われている創玄展に朝から伺った。書道芸術院のように全部門を網羅している会ではないので書風が限られるように思うがレベルはかなり高い。「最近書く枚数が減った」とささやかれるが、明



創玄展の会場

らかにこの会では画仙紙が大量に消費されているのがわかる。作品だけでなく組織運営も見習うべき点が多々。次代を担う人材がここでは育っている。

その後、翌17日上野精養軒で行われる書道芸術院評議員会・総局支局長会議・理事会の打合せで上野に。早々に打合せを終えて東京都美術館へ。これまた創玄展の2会場目に伺った。幹部作品と入選者・学生の作品が陳列されていた。いったい何点あったであろうか。

午後は銀座へ。毎日書道展大字書部で日頃お世話になっている玄潮会の会長石原大流先生の個展に伺った。大迫力の漢字作品がズラリ。その後有楽町で行われている、東京書道会所属、やはり大字書部の鈴木響泉先生率いる青桐会書展に。澄んだ墨色の作品が印象的であった。

17日は前述の会議が行われ、昨年度の事業報告と新年度の事業計画が発表された。いよいよ4月から書道芸術院は新体制。事務所内も緊張感いっぱいである。院の会議を終えたとタクシーを飛ばして1人銀座へ。夕方から燕京書道交流協会の常任理事会・講演会・総会・懇親会と朝から晩まで会議の1日であった。

・訂正とお詫び

先月号でご紹介しました書道芸術院展の「峰雪賞選考」の日時は、10日の誤りです。

◇4月から書道芸術院は「公益財団法人」となり新体制がスタートした。細かいところでは封筒の印刷から公印から、すべてが新しくなった。人事異動もあった。事務所の看板ももちろん刷新。これに伴い全日本学校書道連盟の看板もなくなった。学生向けの雑誌「書の教室」は「書道芸術学生版」と改名。事務処理については、何をするにしろもいちいち記録をとり書類に残さなければならなくなり、細かい仕事が増えつつある。何もかもが杓子定規にいかないこともある。が、なじがらめ融通が利かなくなると、いか心配している。組織が大きくなると仕方ないかもしれないが、今の時代、本来ならばさまざまな手続きが簡略化されないといけないと思う。いざれ整理されるだろうが、現時点では時代



新体制最初の理事会

に逆行している感がしてならない。  
◇4月10日はより効率的な事務処理を行うため、業者さんを交えて事務所でのコンピュータシステムの打合せを行った。事務所での処理はもちろんのこと、書道芸術院展の事務処理もより簡略化できればと思っている。今まで見慣れた出品票も入賞者名簿引換証も形式が変わる予定である。6月中には大まかに決まるであろう。  
16日には毎日書道展の事務局合同会議が行われた。各部門・全国から委員が集まるので会場の如水会館は満席である。後半は部門ごとに集まり、審査の流れを打ち合わせた。本年は第65回を数え、記念の年なので賞の数も若干増える。全国巡回展もすでにスタートしている。関西は兵庫県豊岡市の城崎大会議館で行われる。



事務局合同会議の様子

◇5月に入り、事務所内のコピー機やファックス、電話機などを整理してそれぞれ連携できるように業者さんに設定していただいた。以前から事務機器の整理をとのことで、2か月くらい前から準備を進めていた。今まで大きなコピー機とファックスが1台ずつあり結構の場所を占領していたが、1台の複合機に集約。今の事務機器は日進月歩で、どんどんよくなっている。処理速度が速く静かで電気が安い。そしてパソコンとの連携がスムーズになりパソコンから直接ファックスを送ったり、必要な文書だけプリントアウトできたりもする。パソコンが事務所にあることが前提でいろいろな事務機器が作られていることを改めて痛感した。予算に關係してくることなのでしょっちゅう更新するわけにはいかないだろうが、間違いなくコストダウンになるので、長い目でみると結局は得することになる。良いものを長く使うか、新しいものをどんどん買い替えるか、モノよって判断しなければならぬのが悩ましい。

◇5月は恒例、第65回毎日書道展の公募作品搬入・整理そして鑑別である。本年は書道芸術院から2088点の出品で昨年比68点減である。地域別でみると東北方面が減少している。震災の影響がそろそろ出始めたのだろうか。出品料減免措置がなくなつたのも要因のひとつかもしれない。鑑別は厳正。当番審査員の挙手により入落が決まる。本年は記念の年で審査員の数は1割程増加している。

◇6月4日は書道芸術院事務所において第67回書道芸術院展運営委員会および実行委員会が開催された。昨年の反省事項を踏まえ綿密な打ち合わせがなされた。来年2月16日は書道芸術院展表彰式・祝賀会と学生展の表彰式が同じ日に行われる。よほど段取りよくしなければ滞る。皆さんのご協力をお願いいたします。



大字書部当番審査員の先生方

◇東京に居ると思わぬ大きな書道の個展を拝見する機会が多い。展覧会の絶対数自体が多いわけだから当たり前なのだが、吉幾三の「俺ら東京さ行ぐだ」の歌のように全国のアチコチから東京に出てきて展覧会をされる。やはり中心は、東京の中でも「銀座」のようだ。ブランド力とアクセスの良さでここに集まるのだろうか。過去には幾多の先輩方もこの「銀座」で個展をされている。

第7回柿下木冠書展が6月11～16日、東京銀座画廊美術館で開催された。柿下木冠先生は静岡県在住。山崎大抱・手島右卿先生に師事。現在、(二財)毎日書道会評議員、独立書人団常務理事、抱一会理事長で毎日書道展



「海嘯」をバックに柿下先生(左)

では大字書部審査会員。お世話になっている先生だ。迫力の大作がズラリと並び壮観な光景が広がる。太平洋の澄んだ海のような墨色も魅力的である。「海嘯」は、東日本大震災の記憶から生まれた大作だそうで自然の脅威を思い起こさせられた。

◇6月末は第65回毎日書道展の入賞審査だった。当番審査員の作品を見る眼は、先月の鑑別とは違いより一層厳しいものとなる。特に誤字については厳しく怪しいものは除外される。前衛書部ではないので読めなければならぬのだ。草書体・甲骨文・金文などで発表するときは特に注意を要する。

本年は記念展で賞の数が1割程増加。



書道芸術院関係の大字書部毎日賞作品(左は武部さんの作品)

それでも難関であるの間違いない。本年の玄遠社関係毎日賞は田口鈴木(漢字)・武部春浦(大字)さんの2名である。



◇今年の東京は暑い。毎日書道展の入賞審査が終わったところ、つまり7月初旬からは、大阪もそうであるが都会特有のアスファルトの照り返しが強い。湿度が低い分、大阪よりはマシなのだろうが徒歩で移動するときは熱風が襲う東神田である。

そんな暑いさなか、7月3日、第65回毎日書道展の会員賞選考が行われた。本年は記念展で各部門に一人ずつ賞の数が増えた。一般公募でも入賞が大変なのだが、会員に対する賞はかなりの難関。本年の書道芸術院関係の受賞者は4人。漢字部・竹本龍江、大字書部・川島舟錦、刻字部・三宅梵、前衛書部・大石仙岳先生が栄えある賞に輝かれた。翌4日は文部科学大臣賞選考。高野山競書大会の審査でもお世話

になっ  
てい  
る  
書  
燈  
社  
の  
船  
本  
芳  
雲  
先  
生  
が  
受  
賞  
さ  
れ  
た。

7月22日は毎日書道展の表彰式・祝賀会であった。



毎日展懇親会

本年の書道芸術院関係受賞者数は、会員賞4、毎日賞16、秀作賞31、佳作賞70、U23新鋭賞3、U23奨励賞5の成績であった。毎日書道展の祝賀会後、書道芸術院主催の祝賀会を芝パークホテルにて開催。本年も司会進行の大役を仰せつかった。大勢の参加者で賑わい事務局としてホッとした。

◇8月17・18日は単位認定講習会である。本年度49回を数え、今回は東京総局（滝春芳総局長）が担当である。熱海の老舗旅館「金城館」での講習であった。日本詩文書作家協会や



講習会実技

創玄書道会などがしよっちゅう講習会をしているとのこと、金城館側も手慣れたもの。スムーズに時間が流れた。漢字・かな・現代詩文・篆刻刻字（本年は刻字）・前衛・原拓書道史・書道芸術院史、書写教育の講義と充実した内容であった。来年は関西総局が担当。運営自体は各総局支局に任されている。皆さんの協力をお願いしたい。

◇単位認定講習会が熱海で終わるや否や東京に直行。8月20・21日と書道芸術院秋季展の審査会員候補公募作品の整理が書道芸術院の事務所、翌日には審査が東京文具会館で行われた。本年の応募点数は359点で、1割程増加した。この中から、厳正な審査の上、秋季菊花賞10点、秋季俊英賞40点が選ばれた。昨年同様の賞数であったため本年は難関であったわけだ。そして公益財団法人化に伴い、従来の入選が秋季俊英賞と改められ、昇格の点数に加えられる。玄遠社関係は漢字部・



秋季展審査の様様

日書道展前衛書部審査会員・(公財)書道芸術院理事で千葉県成田市にある成田高等学校に長年勤務、地元で密着されて書教育・作家活動に尽力されてきた。

「最初は同業の先生方や卒業生たちと気楽な飲み会でもできたらしいなとのことであつたが、気が付けばお事になつていた。」と祝賀会のご挨拶。「この年になると東京で大きな個展をされる方もおられるが私は地域密着の、お世話になつた成田で開催したかつた。」とも。先生のお人柄が伺える。過去の作品を振り返るとの趣旨で、若いころの作品から近作まで、大小あわせて30点ほど出品されていた。教え子には成田市長や市役所の職員の方々、成田に関係のある方が多数おられ、祝賀会は盛り上がった。

◇8月27日〜9月1日、板垣洞仙先生が古稀の個展を成田生涯学習市民ギャラリーで開催された。先生は毎

日書道展前衛書部審査会員・(公財)書道芸術院理事で千葉県成田市にある成田高等学校に長年勤務、地元で密着されて書教育・作家活動に尽力されてきた。



板垣洞仙古稀書展会場

◇9月12日～17日、書道芸術院事務局長の千葉着玄先生がせんだいメディアアテックにて大個展をされた。テーマは『鎮魂と復活PART II』。東日本大震災後、様々な思いを被災者の立場からシリーズ化して展開されている。今回はその集大成というべきもの。天井までの高さ6メートルの広大なホールに大作が20点ほどズラリと並び圧巻というほかない。真正面には、本年1月に東

京都美術館の企画展「公募展の今」への出品作を再展示。30メートルの壁面に、一点だけスポットを当てた効果的な陳列で



『鎮魂と復活PART II』

人々の心を奪う。中には涙を流す人の姿も。入場者数は6,000名弱。千葉先生が案内状を出された人だけでなく、通りがかりの人が結構見ていられる。本来展覧会はこうでなければならない。「見ていただいてなんぼ」の世界なのだ。

◇9月25・26日と月例競書雑誌「書道芸術」の昇級昇段試験が事務所内で行われた。作品の種類も受験者数も多いのでたくさんのお手紙を要する。いつも近隣にお

住いの先生方の協力を得て成り立っている。師範昇級の審査は書道芸術院の幹部の先生方がされるのだが、これがまた厳しい。厳格な審査で出品者数の4分の1程しか師範に合格しない。

◇9月30日は書道芸術院秋季展の陳列である。東京セントラル美術館では朝から行われ、毎日アートサロン（推薦作家展）では午後から。セントラル会場の陳列計画は本年も私が担当。作品の傾向などをみて辻元先生に調整していただいた。夕刻から推薦作家展の会場でオープニングパーティーが和やかに行われた。

翌日はセントラルで、朝から表彰式、研究会、夕方から懇親会。司会は昨年引き続き私が担当。最近出番が多くなってきた。昨年にも増して多数の来場者があり一安心である。

懇親会が終わるや否や燕京書道交流協会の常任理事会へ恩地先生はじめ数人で直行。それが終わると秋季展の懇親会二次会へ逆戻り。長い長い一日であった。



研究会で恩地先生の総評

◇10月1日～6日、書道芸術院秋季展が開催されたわけだが、その会期中、急遽4日に帰阪。5日から始まるABCハウジング奈良登美が丘で行われる「壘土舎書のある家展」を奈良新聞が是非取材をしたいとのことであった。こちらから報道関係に取材を申し込んでもなかなか取り合ってもらえないことなので、これほど嬉しいことはない。壘土舎結成のいきさつや活動状況、そして、何とんでも『書』の「楽しみ」を作品、書道会(界)を織り交ぜて自分なりに精一杯お話しせていただいた。

この際に感じたことと今思うことを少し述べます。

整った文字を書きたいと願って入会する人はそうは思わないが、お習字の段階を過ぎた人が、最近教室などに通わず、「個」だけで楽しまれる方(特に若い人や初心者)が多いように思う。しかし、やはり教室に通ってたくさんの先輩に囲まれ、仲間を作って楽しみながら切磋琢磨するのが結果的にはさまざまな意味でいいように思う。独り立ちはもつと後でよいと考える。

それには教室もしくは会が楽しくなけ

ればならない。「書」を楽しもうと思つて入会もしくは居続けるわけだから、この人たちは「書」の楽しみは知っているわけである。教室にはベテランから初心者までさまざま。特に初心者が『楽しい』と感じる場所であればこの人たちは続かない。指導者がさまざまな要望を受け止める包容力が大きくなければ不可能。これはその教室の指導者の問題でもあるだろうがそれだけではないはず。長年その教室に通う先輩方にも自覚していただき、楽しい雰囲気づくりのお手伝いをしていただきたい。誰しも面白くない場所には足を運びたくないものだ。仕事に來ているわけではないのだから。

書道芸術院は、もちろん大きな組織なので仕事量は多いのだが、事務所の雰囲気はよい。辻元理事長・千葉事務局長はじめ、明るい院の皆さんのお陰で楽しくお仕事をさせていただいている。



書道芸術学生版昇級試験の様子